

「今日の説教、聴き手のために」 2008/8/17 明治学院教会(124)

(このプリントは毎週作っているものです)

岩井健作

「つばめが雛を育くむように」

詩編84：1～13

- 1、詩編84編は「万軍の主(神)」と同時に「神の宮」をたたえる巡礼者の歌。秋の収穫の後の雨も終わり、巡礼の季節の到来。「嘆きの谷」、「涙の谷」(直訳「バーカーの谷」)はエルサレムへの行程の荒れた谷。比喩的には、人生航路における信仰者の苦しい経験を暗示。しかし帰る場があると。
- 2、詩人は「盾とする人」・「王」のために祈る(9.10)。「王」に、神が生きて働くとは旧約の人々の信仰の理想(現実には、王は民の上に君臨し支配し搾取する者が多かった)。それがなお「油注がれた人」「メシア」「救い主」の思想に通じ、「待望」として旧約時代の人々を支えた。
- 3、「あなたの庭で過ごす一日は千日にまさる恵みです」(11)。神殿への回帰と日常生活への派遣へのサイクルを述べたもの。民族学的な感覚のハレとケ、祭りと労働、解放と束縛というリズムの大切さが歌われている。
- 4、「あなたの祭壇に、鳥はすみかを作り、燕は巣をかけて、雛をおいでします。万軍の主、わたしの王、わたしの神よ。」(4)。神殿の荒廃と解釈する学者があるが、無理。ここは、象徴、比喩。神殿に燕が巣をかけ雛を育くむことが、自分達の人生にとっての深い象徴。
- 5、燕の不思議な回帰本能が比喩となって、巡礼者の世俗の日常にありながら、なお神の宮での祈りへと回帰するリズムが与えられていることを燕に託している。さらに「燕が、巣を掛けて、雛を置いている」ことから「育み」の営みの全体が持っている命の姿の象徴的意味が深く覚えらる。恐らく巡礼は子供もつれての旅であった。「雛を置いている」という言葉に、自分が、子供を育てるといふ事に働いている恵みを、また、自分が、神に、育てられている、という信仰を顧みている。
- 6、育てる、という苦勞、育てられているという感謝の同時性が比喩になっている。「育む」と「育まれる」は、関係概念である。「親の恩、子知らず」は同時に「子を持って知る。親の恩」に通じる。「勇気をだして心に広い道を見る」。勇気をださなければ越えられない道がある。「祈りを聞いてください」(9)という苦難の叫びはある。しかし、詩全体は、それを突き破って進んでいく、希望や喜びに満ちている。「いかに幸いでしょう。」が三回(①神殿の奉仕者(祭司や聖歌隊)への祝福(5)。②勇気を出すこと。③主に依り頼む人)繰り返される。
- 7、鶴見俊助氏が「親教育」というなだいなだ氏に言葉に感心している。子の存在が親を育てるといふ関係だ。燕も子にはぐくまれる面もある。